

決は、植民地支配の歴史的事実さへ認めず、アジアの民衆からの人権回復の訴えに憎悪をむき出しにするヘイトスピーチと本質的には変わらない。日本社会の現状を象徴する判決であったと言える。だからこそ我々は負けるわけにはいかない。6月7日、原告らは東京高等裁判所に控訴した。不当判決に立ち会った、原告、弁護士、支援者で、

これでもう終わりだと考える者は誰もいない。「今日は負けたが、勝つまで止まることなくあきらめずに、みなさんとともに闘っていききたい」(太平洋戦争被害者補償推進協議会共同代表・李熙子さん)との呼びかけに応え、合祀取消しを実現するまで、共に闘うことをここに決意するものである。(やまもと・なおよし/ノー!ハプサ、写真提供:筆者)

山の手空襲を語りつぐ集い

—山の手空襲を記録し、伝える営みの現在地

山本 唯人

2016年から毎年1回、表参道界隈の会場で、山の手空襲を語りつぐ集いを開催しています。今年6月16日、渋谷区地域交流センター神宮前で開催したつどいで、4回目になりました。

「語りつぐ集い」のきっかけは、2015年5月25日、青山善光寺で恒例の戦災殉難者追善法要に参加したあと、「表参道が燃えた日」編集委員会の比留間柏子さんと、和・ピースリングのメンバー、うちゅうばくはつがくだんのシマカワコウジさんで、語り合ったことにあります。

10月22日、表参道北村ビルのアグネ技術センター会議室に、比留間さんのお世話で

集まった地元関係者と和・ピースリングメンバーが話し合い、翌2016年5月29日、穂田区民会館で第1回の山の手空襲を語りつぐ集いが開催されました。

当日は午前中、プレ企画としてキャットストリート遊歩道でうちゅうばくはつがくだんにより紙芝居『ライオンマン』を上演、午後つどいを開演、第1部でプレ企画と同じ紙芝居、第2部は戦前・戦中・戦後の表参道界隈を写した写真の上映会と体験者による解説トーク、第3部は青山学院高等部・大学生、地元住民により体験記を朗読しました。

2017年5月28日の第2回のつどいか

らは、第1部を「地図で伝える」として、スクリーンに大きな地図を投影しながら、空襲体験者から戦前の街・空襲当夜の状況のお話、第2部を「朗読 表参道が燃えた日」として、体験記を再構成した台本を青山学院初中高等部生徒など、地元で学ぶ生徒徒や住民、関係者により朗読し、その後、朗読に参加した若い世代の質問を入口に討論・交流という3部構成のプログラムが定着しました。

第3回は2018年6月17日に開催、第4回では定例のプログラムに加えて、空襲体験記を子どもでも読めるように再編集した学習用の冊子『語りつぐ「表参道が燃えた日」—山の手大空襲の体験記 戦争を知らない子どもたちとその子たちへ』を刊行しました。

*

つどい実行委員会の軸になったのは、青山・原宿地域で1945年5月25日の山の手空襲を体験した人に呼びかけて、『表参道が燃えた日—山の手大空襲の体験記』(2008年、増補版2000年)、『続表参道が燃えた日—山の手大空襲の体験記』(2011年)を刊行した編集委員会のメンバーです。事務局の比留間さんは、初期からつどい実行委員会の中心メンバーになりました。

この体験記集は、2007年1月27日、

港区が戦災死者の慰霊を趣旨として、表参道・みずほ銀行脇に記念碑を建立するにあたり、それを求める地元有志の署名運動をきっかけに刊行されました。この運動をきっかけに、一旦、散り散りになりかけていた、地元空襲体験者のつながりが、少しずつ取り戻されました。「語りつぐ集い」は、戦後60年を機に起こった記念碑建設運動、それと連動する体験記集刊行のプロジェクトの流れを引き継いで、はじまったと言えます。

実行委員会に、若い世代から参加したのが和・ピースリングです。和・ピースリングは、2005年3月、六本木ヒルズで開催された「東京大空襲」展を手伝ったボランティアにより結成された市民グループです。2006年から7回にわたり、東京空襲遺族会、東友会（東京都被団協）と共同で、「差別なき戦後補償」をテーマに浅草ウオーク

を開催しました。2012年ごろから「継承」をテーマに活動の幅を広

げ、このつどいをきっかけに、表参道周辺の動きに参加するようになりました。

もう一つの軸となる参加者は、原宿の穏田商店会（現穏田キャットストリート商店会）です。つどいの実行委員会は、個人有志の集まりを基本にしながら、この3つの協力団体が中心になっています。共同代表は旧青山北町6丁目出身で「表参道が燃えた日」編集委員の泉宏さん、旧穏田1丁目出身でつどいの開始当時穏田商店会顧問だった佐藤銀重さんが務めています。二人とも山の手空襲の体験者で、泉さんはお父さんを亡くした遺族でもあります。

そのほかに、元青山学院高等部教員で、旧原宿一丁目の空襲体験者でもある田中昭雄さん、元青山学院中等部教員の佐藤いつ子さん、コープみらい有志の方々などが、定例の実行委員会メンバーです。佐藤いつさんは、毎年の朗読台本、今年刊行された学習用冊子の執筆を中心に担当しました。

このように、青山・原宿界隈の体験者中

「つぐ集い」なのです。

*

米軍が表参道一帯を焼き払った山の手空襲は、1945年5月25日22時38分に投弾が始まり、日付が変わって26日1時13分に終わりました（米軍資料）。

東京空襲と言えば、3月10日に下町一帯を攻撃して、約10万人の死者を出した「東京大空襲」が有名ですが、実は米軍が東京を目標にした大規模無差別爆撃は、3月10日も含めて5回ありました。

そのうち、下町空襲の約2倍の重量の焼夷弾を投下し、警視庁資料で3242人の死者を出したのが5月25日の山の手空襲です。下町に比べて死者数が一桁少ないため、比較的小さな空襲というイメージを持っている人もいるかもしれません。実際は、下町の約2倍の量の焼夷弾を投下した、文字通りの大規模無差別爆撃でした。

しかし、下町に比べて、山の手空襲は記録の量が乏しく、詳しい状況が分かりません。さらに、戦後の記録運動・研究は、犠牲者の大きい下町を中心に行われたため、資料や体験の掘り起こしも不十分です。早乙女勝元著『東京大空襲』（岩波新書、1971年）のような、定番的な歴史書もないため、具体的に地上で何が起きたか、一般にはあまり知られていません。



つどいの活動のなかで、表参道交差点・旧安田銀行前(現みずほ銀行前)、旧原宿一丁目・熊野神社に隣接する新道などでは、推定数100人単位の死者が出たことが証言などによって明らかになりましたが、こうした事実は、死者数のみを抽出した公文書には残っていません。

証言と資料を突き合わせ、この夜何が起

きたのか、なぜ、それほど多くのひとが、その場所で亡くなったのか。基礎的な事実を明らかにすることから、課題が残っています。

つどいのエネルギーは、まだ当分の間、持続するものと思われま

す。(やまもと・ただひと／青山学院女子短期大学、写真提供…筆者)

空襲の記憶から平和をつくる 熊谷空襲と市民運動

加藤 一夫

2015年10月末、私は、25年近く住んだ海辺の街、静岡県焼津市から妻の実家がある「海なし県」埼玉県熊谷市に移転した。それからすでに4年が過ぎた。

熊谷市は、その昔、源平合戦で活躍した熊谷直実ゆかりの地であり、江戸時代は中山道の宿場町で、首都圏の関東北部に位置している人口約20万人の町である。江戸時代から続く「うちわ祭り」(毎年7月)は今も続いている。日本一暑い町としても知られている(2018年7月には41.1度Cを記録)。今年(2019年)はラグビーW杯の主催地の一つで、市は「ラグビータウン」として売り出している。

実は熊谷市は1945年8月14日深夜と15日未明(午前2時頃まで)に米軍の空襲を受けた「最後の空襲」都市(秋田、小田原、伊勢崎など)の一つである。房総半島の南方から侵入してきた89機のB29が高度3000〜5000メートル上空から照明弾と共に多くの焼夷弾を投下した。この空襲で死者266人と負傷者約3000人を出し、市街地面積の74%、全戸数9020戸の40%に当たる3630戸が罹災し、全人口(当時約55000人)の28%に当たる15390人が罹災者となり、多くの公的建物、学校、文化財施設、寺院などが焼失した。「玉音放送」から12時程前の出来事

である。

なぜポツダム宣言受諾直後の8月14日夜と15日未明に空襲されたのか。様々な見解がある(中島飛行機の部品製造都市だったなどが、米軍は、場当たりの作戦でなく来るべき本土上陸決戦の一環として明確な軍事作戦にしたがって空爆を実行したことは、すでに公開されている米軍資料で明らかになっている)。

この空襲については、節目の年ごとに市や公的機関が報告書を出版しているし、様々な運動体や地域の研究会、郷土史家たちも記録を出している、その全体像もほぼ分かっている。当時の市民の体験談も多く綴られていて、その被災の全容や悲惨な状況が浮かび上がっている。妻の実家もこの空襲で全焼したという。

ただ、これらの報告や発言には、当時、日本が戦争をしていて、それに市民も全面協力していたという当事者意識はあまり感じられない。時がたつにつれて諦観が強まり、この出来事はあたかも地震や津波、洪水災害の罹災者と同じ次元で語られることが多い。

熊谷だけではない。日本のどこの地域でも、空襲体験を忘れないとして多くの運動が行われ記録も出版されている。しかし、その結果は、成功したとは言えない。この